

インクルーシブ教育に対する提言

12月3日の「みんなの学校」上映会とシンポジウムを終え、インクルーシブ教育について関心がさらに深まった。「ともに学ぶ」ことの大切さ、困難さを考えさせられる。

そんな折に、名古屋市立大滝子キャンパスの図書館で、『発達障害研究』38巻3号、2016年のある論文に目があった。それは「就学支援の現状と今後の課題—インクルーシブ教育システムの構築を目指して」という特集のなかにあった。表題は論文のサブタイトルであり、主題は「親の立場から考える就学支援」である。



筆者は国立民族学博物館の信田敏宏さん。要旨の最初から。「本論では、ダウン症のある子どもを持つ筆者が実際に経験した小学校入学前および中学校入学前の就学支援の実態を記述し、親の立場から、インクルーシブ教育を実現していくうえで何が重要かということについて、具体例を示しながら、ささやかな提言を行う」

関心が高まったインクルーシブ教育を考えるうえで、示唆に富む指摘も多いので、提言の一部だけでも紹介しておきたい。

学校生活というのは、子どもの成長に大きな影響を与える大切な時間です。障害の有無にかかわらず、地域子どもたちがともに学ぶことができる環境は、より良い社会を築いていくうえで必要不可欠なことだと思います。障害のある子どもたちが、健常の子どもたちとは異なる特別な環境(支援学級や支援学校)におかれている現状では、健常の子どもたちが大人になった時、「障害者は自分たちとは別のところで暮らしていく、生きていく」ことが当たり前だと思うのではないのでしょうか。

私たち親の世代は、学校教育の場において障害のある子どもたちとの貴重な交流の場を奪われてきた世代ですので、障害に対する正しい理解がまだまだ足りない世代なのです。しかし、インクルーシブ教育が進められていくなかで、状況は以前よりも良くなっています。そうしたことをさらに進めていくためには、同じ地域に暮らす子どもたちがみんな一緒に同じ学校に通い、助け合いながら学校生活を送ることを目指すことが必要です。そうした環境が当然の環境となれば、子どもたちが大人になった時、障害のある人もない人も同じ社会のなかでともに助け合いながら生きていくことが自然のことだと思うようになるのではないのでしょうか。少なくともそう思う人が、今よりは増えていくはずだと思います。

インクルーシブ教育は、日本ではまだまだ道半ばかと思います。すべての学校で、イ

インクルーシブ教育を実現することは、現実的には不可能に近いことではないかとも思っています。けれども、一歩ずつでもそういった環境づくりが進んでいくことを強く願っています。

私たちが今の段階で望むことは、インクルーシブ教育を実施する小・中学校のモデル校の設置です。そうした学校が地域に一校でもあれば、障害の程度にかかわらず、障害のある子どもたちが、十分なサポートを受けながら、普通学級の子どもたちとの交流を楽しめるのではないかと思います。それと同時に、健常の子どもたちにとっても、障害のある子どもたちとの交流という人生において貴重な経験をすることができると思います。こうした経験が、これまで少なかったこと、とりわけ、重い障害のある子どもたちが健常の子どもたちとの交流の場を排除されてきたことは、残念なことです。今後、排除よりも包摂を目指す、まさにインクルーシブ教育を実現していくためには、障害の程度にかかわらず、子どもたちが一人ひとりのニーズに見合った教育を受けることができる場を用意する必要があるのではないかと思います。

インクルーシブ教育が目指す彼方には、インクルーシブな社会の実現があると思います。障害の有無にかかわらず、すべての人が包摂され、互いに助け合い、支え合いながら生きていく社会を目指すのであれば、そこに生きる「人」を育てていかなければなりません。そのためには、今こそインクルーシブ教育が必要だと思います。

(2016年12月16日)